

解説 山荘で静養中、国家の前途を案じて詠じた詩。

一穗寒燈照眼明 沈思默坐無限情
回頭知己人已遠 丈夫畢竟豈計名
世難多年萬骨枯 廟堂風色幾變更
年如流水去不返 人似草木爭春榮
邦家前路不容易 三千餘萬蒼生
山堂夜半夢難結 千嶽萬峰風雨聲

偶成（木戸孝充）

一穗の 寒燈 眼を 照して 明かなり

沈思 默坐 限り 無きの 情

頭を 回らせば 知己 人 己に 遠し

丈夫 畢竟 豈 名を 計らんや

世難 多年 万骨 枯れ

廟堂の 風色 幾 變更

年は 流水の 如く 去つて 返らず

人は 草木に 似て 春榮を 争う

邦家の 前路 容易 ならず

三千 余万 蒼生を 奈んせん

山堂 夜半 夢 結び 難し

千嶽 万峰 風雨の 声

語釈 ※偶成Ⅱたまたま成るの意。

※一穗Ⅱ一燈に同じ。※寒燈Ⅱさびしい燈火。※沈思默坐Ⅱ物思いにふける。

※無限情Ⅱ尽きることなき思い。※回頭Ⅱ回想。追憶の意。※知己Ⅱ親しい友人。

※人已遠Ⅱすでに遠い過去の人となった。

※丈夫Ⅱ男子。※畢竟Ⅱ所詮。結局。

※豈計名Ⅱなぜ名声と利益を考えるのだ。

※世難Ⅱ時世の困難なこと。※万骨枯Ⅱ

多くの人が死んで枯骨となったこと。

※廟堂Ⅱ朝廷。※風色Ⅱその様子。

※幾變更Ⅱ度々変ること。※春榮Ⅱ青く

草木が繁茂すること。※邦家Ⅱわが国。

※前路Ⅱ将来、前途。※三千余万Ⅱ明治

初年の日本の総人口は三千余万であった。

※奈Ⅱどうすればよいのかの意。※蒼生

Ⅱ國民。※山堂Ⅱ孝允の山荘。※夢難結

Ⅱ寝つかれないままの状態。※千岳万峰

Ⅱ多くの山や峰。

通釈 寒々とした燈火が一つ、眼を射るように明るい。静かに坐して思いめぐらすと、色々な事が浮かんでくる。思い返せば、かつて共に国事に奔走した友も、遠い過去の人となった。男児の目的は名利を図ることではない。皆、国のために一身を捧げたのである。長年の動乱で多くの人材が犠牲になり、辛い生きのびて今朝廷にある者は人も気風も変わってしまった、地位権勢におごり、分を忘れて贅沢になっている。歳月は流れる川の水のように過ぎ去っていく。すでに鬼籍に入った者は返ってこない。我々は、深く反省する必要があるしはないか。それなのに、草木が春榮を争うように、ただ自分の事のみを考えている。わが日本の前途は容易ならざる状態なのに、三千余万の国民をどうするつもりなのか。自分は今、この山中に静養しながらも、国の将来を思うと、眠ることも出来ない。今宵も、周囲の山々に吹きすさぶ風雨の音を耳にしながら、苦悩に身を責められるのである。